4.3 アウトラインを練る

調べ物が一段落したところで，あるいは調べ物をしている最中に，「最初の問い･答えのペアは課題に相応しいか？」「集めた情報はその答えにつながるか？」「答えの修正でなく問いを見直すほうがよいのではないか？」と，集めた情報群を眺めてよく考える。そして，レポート全体としてどういう構成になるべきか，その骨組みとなるアウトラインを構想する。集めた情報を取捨選択して，複数の情報源の内容を融合させて，筋道のとおった一連の説明になるよう項目立てをし直して…とよく考える。メモに手書きでマップのように整理してみるのもよい。

4.3.1 序論→本論→結論の構成

アウトラインが大凡(おおよそ)見えてきたら，これまで集めた材料を整理する。通常アカデミック･ライティングの文章は①序論，②本論，③結論の３つの部分に分かれる。

① 序論(序，はじめに)：「問い」や全体の概要を紹介する。どのようなテーマを扱うのか，そのテーマの重要性は何か，そのテーマについてどのような先行研究があるのか，どのような新たな問題意識を持っているのかなどを述べる。

② 本論：集めた情報を検証しながら論理的な筋道を辿って，ひとりよがりの議論にならないように「答え」を述べる。アウトラインに沿って複数のパラグラフ構成となる(パラグラフについては後述)。

③ 結論(おわりに，まとめ)：序論で提起した「問い」と本論で展開した「答え」を簡潔にまとめたり再確認したりする。何が解明され，何が課題として残ったのかを述べるが，本論で論じていないことは書かない。

短いレポート(1,000字程度)では，①序論；１パラグラフ，②本論；３パラグラフ，③結論；１パラグラフぐらいの構成になる。少し長いレポート(3,000字以上)では，②本論が大きくなり，その構成が複雑になる。論拠となる事実を述べる部分以外に,事実を基に新たな分析を加えたり，予想される反論を自ら挙げてそれを論駁(ろんばく)したりする必要があるかもしれない。分野にもよるが，②本論を「テーマの深化」と「解決策の提案」のようにふたつの部分に分けることもある。

> 各部分の文章の量が多い場合などは章を区切ったり，さらにその中に節や項を置いたりすることもできる。この小冊子のように「4.3.1 」のような表記で区切る方法もある。

4.3.2 書いてはいけないこと

随筆系の作文では「起･承･転･結」の４部構成がよいと教わった人が多いだろう。しかしアカデミック･ライティングでは「転」での急転回により読者を戸惑わせることがあってはいけない。また落語の落ちや推理小説における伏線，映画のラストシーンにありがちな余韻などのような工夫も無用である。

あなたが考えに考えて苦労して得た「答え」に達する思考過程をそのまま逐次述べてはいけない(それでは物語になってしまう)。根拠を整理して論理立てて説明する必要がある。当然のことであるが，根拠となる事実を捏造(ねつぞう)したり，統計データを不当に解釈したりするのは厳禁である。特定の権威に論証を委ねたり，一般的イメージや感情に訴えたりする説明法もアカデミック・ライティングでは避けなければいけない。

レポートの最後の部分に，自分の考えのまとめではなく，主観的な感想や反省を込めた想いが書いてあるのを時々見かけるが，客観的でないそのような文章はレポートや小論文には不要である(もしどうしても書きたいのであれば，レポート本文と離して，参考文献リストの後に「感想」の項を設けて書くことは許されるだろう)。